

真剣に生きる男に恋しなさい！

フェル難DESU

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひたすら名を隠し続けた名も無き最強の一族の生き残りが平和に、真剣に、恋に生きる話。

でも平和って、大体どこかで粉碎されると思うんだ……………

目次

少年期	1話	少年、知り合いの家に向かう	1
少年期	2話	初幼馴染 かつこ年下かつことじる	4

少年期 1話 少年、知り合いの家に向かう

「父さん、どこ行くの？」

「ん〜？」

妻が運転する車の中、ふと息子である明が質問をしてくる。当然俺、下崎望は答えることを即座に判断する。

どこに行くか……

「知り合いの家だよ〜」

無難に知り合いと答える。まあ実際は親友と言える位仲が良いけどな。

「しりあい？」

「そうだよ？ 父さんの数少ない知り合いさ」

「すくない？」

「そうさ」

「……ぼっち？」

「ぐふっ！」

短いやり取りながらも的確に急所を突いてくる息子。ま、待ってくれ、ぼっちとか言わないでくれ！ 今のは本気で聞いた！ たとえ首を傾げながら可愛らしく言ってくれても！ 本来なら写真に収めるんだけど!! それをぶっ飛ばしてもいいくらいに効いた!! やばい、心の中で涙が…。

俺は息子のオリハルコン並みのえげつなく斬れた言葉に何とか耐えきると、まず間違いなくそのオリハルコンの元凶であろう妻兼現在

運転手である、雪奈に恨みを込めた視線を送る。

「ああら何かしら？ 私の顔に何かついてる？」

「ああそうだな、憎たらしいくらいに綺麗な顔のパーツがついてるな！ てめえ！ また明にいらんことを教えただろう！」

「エー、ワタシワカンナクイ」

「いやいや！ 片言だから！ バレバレだから！ 普通6歳の子がぼっちなんて言うか！」

「無きにも非ず」

「かもしれないが基本ないだろ!？」

「可能性は、無限」

「その無限が通用するか！」

運転しながらも俺の言葉の追撃を躲す雪奈は完全なるドS！ 見てみるあの正面向きながらも確実に笑ってるであろう顔を！ バックミラーで見えんだぞ！

「やあね、勉強よ、ベ・ん・きよ・う、はーと」

「何が勉強、ハート、だ！」

「頭は良いに越したことはないのよ？」

「でもね？ この言葉はいかんよ？ いじめっ子の言葉よ？」

「いじめられるなら、いじめてしまえ、ホトトギス」

「最低じゃねえか！」

まるでコントの様に会話をする俺と雪奈。 勿論、会話に使われる玉は、俺はドツジボール、雪奈は12.7x99mm NATO弾と表現しよう。 ついでに妻の弾である12.7x99mm NATO弾はアンチマテリアルライフルのあれである。

「はいはい、何でもいいけどそろそろ京都なんですけどそれは？」

「え？ あ、もう？」

「ただだけ周り見てないのよ……当の昔に高速降りてるでしょうが。ね〜パパはダメダメよねえ、明」

「……ダメオ？」

「やめろおおおお!! M A ・ D A ・ O 並みに嫌な言葉だああああ!!!」

「じゃかあしい!」

「ぼぐふっ!!」

叫びすぎたのがイケなかったのだろう、目にも見えない速度のよそ見左ストレートが横腹に刺さる。当然無防備なのでダメージ倍率は2倍くらいになる。つうか、超いてえ……

「ほらそろそろ道言つてよ、ミサゴちゃんちまでの」

「げほっ、げほっ……とりあえず、しばらくまっすぐで」

「はいはい」

ああくそ、痛みを堪えて言ってもこの流されようだぜ。まあ今更なんだけどな。

とりあえず、痛みを治めつつ道順を教えながら親友である『松永家』を目指すのであった。

つうか、マジいてえよ……

少年期 2話 初幼馴染 かつこ年下かつことじる

「雪奈くくく!!」

「ミサゴくくく!!」

松永家について早々車から降りると雪奈と俺の親友の奥さん、松永ミサゴさんは久方ぶりの再開にはしゃぎながらハグをする。

歳を取ってもまるで若いそこの女子大生の様にはしゃげるのは、ある意味若いのもかもしれない。いや実際まだ若いけどね。うん、俺も、雪奈も、松永夫妻も、20代。

「ひつきしぶりくくく!! どう! 元気してた!？」

「まあまあねえ。相も変わらざるんびりとして生活を送ってるわ」

「でもいいじゃん! メールで見ただけど、子供、産まれたんでしょ!」

しっかしあれだよなあ、いつも思うんだけど、よくもまあこんなべっぴんさんを捕まえたもんだあの野郎。正直釣り合いが取れてない感が凄い。

「そうそう、そうなのよ! 可愛いわよ!」

「ぜひとも見ないと! 名前は?」

「名前はね、つね」

「ミサゴくくく、燕ちゃんがくくく!」

ミサゴさんが名前を言おうとしたとき、玄関の奥から何とも情けない声が響く。そしてその声を聞いたミサゴさんというと…

「はあ…」

「あゝあ…」

案の定頭に手をやり、呆れと共に溜息をこぼしていた。まあミサゴさん、性格的に情けない男は嫌いだからなあ。だからこそ、どうやってゲットしたのかが謎なんだよなあ。

そうこうしているとどたと走る音がし、玄関に俺の親友である、松永久信が姿を現した。つうか、何で作業着？

「全く……今度は何？」

「燕ちゃんが泣き止まないんだよ！ あ、望君、雪奈ちゃん、いらっしやくい！ 明君もよく来たね！」

「どうもです」

「おう、お邪魔してるぞ」

「こんばんわ、久信おじさん」

「うん、上がってってね！ でき、燕ちゃんがn」

「はいはい、さっさとこっちによこしなさいな」

挨拶も程々にすると、要件をミサゴさんに言った久信は相も変わらぬの情けなさ全開である。おい雪奈、俺の顔を見ながらお前も人のこと言えんだろ？ みたいな顔をするな！ そこまで情けなくなかったはずだ！……たぶん。

「全く……ごはんの時間以外なら対処出来るでしょうに」

「うう、ごめんよミサゴ」

「はあ…はあい燕ちゃん、今度はどうしたのかなあ？」

久信から娘の燕ちゃんを受け取るとさつきとは打って変わって母親の顔で燕ちゃんに喋り掛けながら家の中に入っていった。

「とりあえず上がって良いか？」

「いいよ、上がって上がって」

「お邪魔します」

上がってすぐに軽い挨拶と、しばらくこつちで生活すること、最近の私生活等々、いろんな話で盛り上がった。その間明は眠っている燕ちゃんを楽しそうに見ていた。時折撫でる時に浮かべる表情はどう見ても妹を大切にしている兄のもの。さすが我が息子！ 出来る！ その調子で1日も早く俺を抜くんだぞ！ お前はできる、確信！

「今回は長くなりそうなんやね」

「そうねえ。『毒』や『お化けちやん』^{クズども}_物がいるからねえ。特に後者は日本はそういうの、多いから。伝説上の生き物とか」

ふと仕事の話に変わる。確かに今回は長くなりそうではある

「そうねえ。しかもよりによって京都だしね」

なんせ歴史が深い。清明とか陰陽師が大量にいたんだし。それだけそういう類が一杯いたってことだ。なら残りが大量にいてもおかしくねえ。

「でも今でも信じられないよ。そんな化け物が居るなんて。悪いやつはいるけどさ」

そりやそうだろうな。前者の人間はともかく、後者のやつらは烏天狗や鶴なんて空想、物語、ゲームでしか普通出てこない。俺だって今の仕事してなきや信じらんねえよ。でも実際そういうやつらは居る。

テレビでよくここらにはどうたら、あそこはどうたらって言って、そんなわけねえだろうって言うてたりするけど、いくつかの内容には本物も混じってる。だからと言ってそんな話をしたところで一部以

外今時の日本人が信じるわけもないし、動くわけではない。直江の旦那のいう、危機感の無いやつらだし。

まあ、俺らみたいな裏稼業専門の奴らが動いてるからってことも原因だから、何とも言えないけどな。

「あんまり無茶しないでよ？ まだ親友を亡くしたりしたくないし」

「今のところその心配はないわよ。それこそ富士の悪い意味で有名なあそこや、川神山の深部じゃあるまいし」

「だといけど……時々不安になるんよ」

「ありがとね。それだけで生きてけるわ」

珍しく本気で心配している様子のミサゴさん。まあ心配になってもおかしくはない。事実、俺の仕事仲間がそいつらに討たれてるから。しかもつい最近だ。その時の遺体の状態は惨いなんてものじゃなかった。明日は我が身……洒落ならん。

「明君にそれを継がせる気？」

「んんん………意思尊重で」

「だな。武術とかは親ばかりかもしれないが、俺らを抜いて将来最強の名を背負える素質もあるし。あいつがしたいというなら、止める気はないぜ。たとえ、それであいつが死ぬことになるって分かってても」

「そう」

俺達にはどうしようもないことだ。明が俺達のする裏家業を本気でしたいというならたとえ止めても止めきれないだろ。人間なんてそんなものだ。一度火が付くとなかなか収まらないもの。火は燃えればすぐに燃え滾る。まあ、早い段階で手を打てば良いだけなんだが、それをしては子供の成長範囲を縮めちゃうからしない。

「まあとりあえず、飯食おうぜ！ せっかく久々に会ったんだしよ！

ほら牛肉！ A5ランクだぜ！」

「おろろろ!! これはもうはしゃぐしかないね!!」

「全く、久信君はすぐに調子に乗るんだから」

「まあ、それはうちの旦那もだし」

しみつたれた話は強引にシャットダウン！ 久々の再会なんだ！

楽しまなきゃ！

その後、酔いつぶれるまで久信と俺は飲みまくり、喰いまくり、次の日は死ぬほど激しい頭痛と吐き気で死にかけて。勿論、軽く飲む程度だったワイフ勢はあつけカランとしており、明や燕ちゃんの相手をしていた。不覚……